ふるさとの誇り

其の33

武家の名門 小笠原氏の祖 小笠原長清 ②

小笠原流流鏑馬は綾藺笠（あやいがさ）を被り、鎌倉武士の狩装束の格好で行い、250ｍもの馬場を疾走しながら3本の的を射ます。

アヤメフェアで行われた「小笠原流流鏑馬」。馬上で弓を射る、研ぎ澄まされた精神力から発する技は、まさに小笠原長清から始まる小笠原氏の伝統の弓馬術です。

先月号に続き、父加賀美遠光から受け継いだ弓馬の腕をさらに代々伝えていく中で育むこととなる「小笠原流」誕生の歴史を紹介します。

全国的に発展する小笠原氏

「弓馬の四天王」として知られる小笠原長清は、源頼朝が選ぶ「弓馬の名手」として書物に幾度も登場し、頼朝のもと鎌倉幕府の重臣として活躍していたことがわかります。

信濃の伴野荘（ともの しょう）（佐久市）をはじめ、全国各地の所領を得た長清は、主に活躍の舞台を信州へと移し、代々信濃（※1）小笠原氏として定着していきます。

このほか小笠原氏は、阿波、京都など全国的に発展し、江戸時代には一族で、小倉藩（※2）をはじめ、勝山藩、安志藩など多くの大名家として活躍します。

小笠原といえば礼法

鎌倉時代以降全国で流鏑馬や射芸の行事が行われる際には、長清をはじめ代々長清の子孫達が演舞者として名を連ね、射芸には小笠原一族は欠かせない存在となりました。

小笠原家の系図には「糾法（きゅうほう）（弓法）的伝」とあり、長清以降小笠原家の嫡流（ちゃくりゅう）に弓法が伝えられ、室町時代には代々小笠原氏が将軍家の弓術師範を務めていました。また、その頃には武術の作法に礼式が加えられ、弓・馬・礼の三つを小笠原氏の伝統の柱とし、さらに3代将軍義満のころから小笠原流礼法が成立し、「小笠原といえば礼法」と呼ばれるようになったと伝わります。

※1 後に武田信玄と戦うこととなる信濃の戦国大名小笠原長時(ながとき)もこの系統です。
※2 惣領家:信濃小笠原家は江戸時代には小倉藩主となります。

アヤメフェアの流鏑馬は小倉藩主小笠原惣領家に伝わる小笠原流流鏑馬を受け継ぐ源長統一門による演舞です。

小笠原小学校舎のレリーフ
長清の業績をたたえ、館跡と伝わる校舎には武芸の様子が描かれています。

小笠原流礼法講座の様子

礼法の真髄は相手を大切に思う心

武家の諸礼式・弓馬礼法の家元として小笠原氏の名は最も世に知られた存在となり、江戸幕府においても幕府公式の礼法とされたようです。

小笠原流礼法とは堅苦しい作法を指すのではなく、T・P・O（時・所・場合）にあわせ、「相手を大切に思う心」を動作にしたもので、現在の私たちにとってこそ必要なものなのかもしれません。

本市の小笠原に館を構えた一人の武将から始まった伝統は、時代を超え、現在のわれわれにも受け入れられている礼法の心として活きています。南アルプス市は相手を大切に思う心の発祥の地ともいえるなんて、まさにふるさとの誇りですね。